

2023年7月9日・佐土原キリスト教会・礼拝説教

聖書箇所：マタイ福音書4章12～17節

説教題：神の国を豊かに生きるために

ある宣教師の方から聞いた話です。数十年前のことですが、日本に来て、日本語の学びを終えて、いよいよ日本語で説教をすることになりました。時間をかけて準備をしたけど、どうしても自信がない。そこで祈られたそうです。「神様、今日の礼拝に誰も来ないようにして下さい」。半分冗談で話されたと思うのですが、宣教師の方々はそうやって必死で働かれたことでしょう。しかし、言葉も不自由な中で伝道が続け—（『神様は人間を愛しておられます』と言うつもりで『神様はエンジンを愛しておられます』と言ってしまった）という話も聞きました）、その結果、教会が生まれて行ったのです。私はそこに、「神様の働き」があったことを思わずにはおられません。神様ご自身が豊かに働いて下さる「神の国」の現実の中で、宣教の働きが続けられ、実を結んで行ったのです。「ここに教会がある」、それだけでも、「神の国」が既に地上に来ている、その現実を見せられる思いがします。また、私達の信仰もそうではないでしょうか。お1人ひとり、それぞれの歩みを経て神を信じるようになられたと思いますが、神の働きの中で導かれた、それは否定出来ないのではないのでしょうか。そこにも、既に地上に来ている「神の国」の現実を思わせられる気がします。

今朝の箇所は、イエスがいよいよ「宣教の公生涯」に入られることを伝える箇所ですが、それはまた、目には見えない、しかし地上に既に来ている「神の国」を豊かに生きるために大切なことを教える箇所です。「神の国」を豊かに、祝福を頂いて生きるために大切なこと、2つを学びます。

1. 神に委ねる

12節に「ヨハネが捕らえられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた」（12）とあります。イエスは、その活動の初めの一時期、バプテスマのヨハネのグループに所属して、ヨルダン川沿いのペレヤにおられたのではないかと思います。そこでバプテスマのヨハネは、洗礼運動を展開していました。しかしイエスは、グループから離れて荒野で「悪魔の誘惑」に遭われました。時を同じくしてバプテスマのヨハネは、ペレヤとガリラヤの領主であったヘロデ・アンティパスに捕らえられてしまいます。ヘロデ・アンティパスという領主は、ヘロデ大王の子供で、ヘロデ大王が死んだ後、ローマに許されてガリラヤとペレヤを支配していました。ところが、自分の兄弟の妻を好きになってしまい、自分の妻を追い出して、兄弟の妻を横取りしてしまいます。バプテスマのヨハネは、それを公に避難しました。それで、ヘロデの怒りを買って捕らえられてしまいました。

「悪魔の誘惑」に勝利され、「宣教の公生涯」に立ち上がる用意が整ったイエス様は、ヨハネが捕らえられて、神の言葉を語ることが出来なくなった、それを1つの「きっかけ—（神の時）」と理解されたのかも知れません。ペレヤからガリラヤに行き、そこで伝道の公生涯に入られるのです。

ガリラヤは、もともとイエス様が育った場所です。でもイエスは、同じガリラヤでも、ご自分が育ったナザレを離れてカペナウムに移り、そこで宣教活動を始められた。ナザレは、人口500人～1000人程のあまりにも小さな村です。そこでガリラヤ宣教に当たっては、交通の要所であり、人口の多い—（5万人程）—カペナウムに拠点を置かれたのだと思います。これ以降、カペナウムは、イエス様の初期ガリラヤ宣教の中心地になります。

イエスがガリラヤに帰られ、そしてカペナウムで伝道を始められた、「マタイ」は、そのことの中に「旧約」の「イザヤ書9章2節」の預言の成就を見ました。「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った」（15～16）。そこは、かつてイスラエルがエジプトから脱出してカナン（パレスチナ）にやって来た時、イスラエル12部族の内、「ゼブルン族」と「ナフタリ族」が相続して住んだ土地でした—（カペナウムはゼブルンとナフタリの境に在りました）。それで「ゼブルンの地、ナフタリの地」と呼ばれました。そこはガリラヤ湖に向かう道であり、都エルサレムに住んでいる人達からすれば、ヨルダン川を越えて行かなければ辿り着けない片田舎でし

た。そこは、イスラエル人の国の北方に位置していたので、絶えず異邦人の攻撃に真っ先にさらされ、異邦人に支配された地でした。辛い歴史を通った地であり、イエスの時代も、人々は様々な苦しみの中にいました。イエスは、そのような場所で活動を始められました。イザヤの預言の通り、「暗黒の中に住んでいる民」は、イエスを通して光に照らされるのです。イエスによって導き入れられた「神の国」の現実の中で、様々な神の業を見て行くのです。イエスを通して、神に語りかけられて行くのです。

しかし、私がここで注目したいのは、12節の「ヨハネが捕らえられたと聞いてイエスは、ガリラヤへ立ちのかれた」(12)という、この「立ちのかれた」という言葉です。「新共同訳」は「退かれた」と訳しています。なぜ、「ガリラヤへ行かれた」とか「帰られた」とかではなくて、「立ちのかれた」、「退かれた」なのでしょう。か。「マタイ福音書」は、この言葉を使うことによって、何を語ろうとしているのでしょうか。

人々の常識からすれば、イエスがメシア(神の救い主)であるなら、メシアは、都エルサレムで活動するはずなのです。「悪魔の誘惑」でも、悪魔はイエス様を「聖なる都に連れて行き、神殿の頂に立たせて…」(4:5)とあります。そこがメシアの現れる所でした。しかしイエスは、そのような世の権力から逃れるようにして、ご自分がメシアとして力を振るうことから逃れるようにして、拒否するかのようにして、田舎のガリラヤへ行かれました。それが、「立ちのかれた」と表現されている意味かも知れません。

しかし15～16節の「イザヤ書9章2節」の預言の言葉は、9章6節で「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる」(イザヤ9:6)という、クリスマスで有名な言葉に繋がって行きます。クリスマスに生まれたイエス様は、ヘロデ王から追われて「エジプトに立ちのき」(2:14)、またエジプトから帰って来ても、ユダヤではなく「ガリラヤ地方に立ちのいた」(2:22)。イエス様の誕生にまつわる出来事についても、「マタイ福音書」は、「立ちのく」という同じ言葉を使うのです。「立ちのく」とはどういうことでしょうか。その意味は「逃げる」ということです。どこに逃げるのか。具体的にはエジプトであり、ガリラヤですが、いずれも神の戒めによって「立ちのく」、つまり神の御旨の中に「立ちのく」、神の中に「立ちのく(逃げる)」、そういうことだったと思います。「マタイ」が12節で「イエスは、ガリラヤへ立ちのかれた」(12)と書く時、それは、「イエスは、伝道の公生涯を、まず神の中に逃れることから始めた、神の御手にご自分を委ねることから、行く先を委ねることからその活動を始めた」と言いたいのではないのでしょうか。

私はここに、私達が「神の国を豊かに生きる」、その大切な在り方があると思います。それは「神の御手に委ねる」という生き方です。ある時、私はあることを先に見て、不安でどうしようもなかったことがあります。その時に、聖書から語られた言葉がありました。「あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる」(詩篇37:5)の言葉です。私は、もう一度、行く道を主に委ねる、主に信頼する、そのことを思い出させてもらいました。「(そうすれば)主が成し遂げてくださる」というのです。「箴言」16章3節には「あなたの業を主にゆだねれば、計らうことは固く立つ」(箴言16:3)という言葉があります。ある先生が、この御言葉に寄せて次のようなことを言っています。「人間の能力には限界があります。どんな働きであれ、はじめから終わりまで、全部をなしとげることはできません。手を放して神にゆだねなければならぬ部分があるのです。ゆだねる部分のない仕事は、たぶん、よい仕事ではありません」(小島誠志)。

イエスが、その公生涯で初めに為さったことは、自分の歩みを神に委ねるということでした。であれば、私達の信仰の生涯にも、「神に委ねる」という部分が大切なのではないのでしょうか。「委ねる」、それは「何もしない」ということではありません。委ねるためには、神への信頼が必要です。精一杯、神への信頼を働かせて、「神にお願いする部分」と「自分の為すべき部分」を教えられ、自分の為すべきことは誠実に実行して行くことだと思えます。でも、最後は「神の大きな御手にお願いする(お任せする)」、そのような思いが大切なのではないのでしょうか。信仰を働かせて、神に任せようとする姿勢、神に期待しようとする姿勢、それが、私達が地上において「神の国」を豊かに生きて

行く上で、大切な在り方だと思います。

2. 悔い改める

しかしこの箇所は、「神の国を生きる」、さらに積極的な姿勢も教えます。公生涯に立たれたイエスは、何を為さったのか。「この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。『悔い改めなさい。天の御国が近づいたから』」(17)。この言葉は、バプテスマのヨハネが語った言葉と同じです。ヨハネも叫びました。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(3:2)。この言葉からも、イエスが「ヨハネの逮捕を受けてヨハネの活動を引き継ごうとされた」ということを感じる事が出来ます。しかし「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」(17)、この言葉はどういう意味なのでしょう。

「天の御国は近づいた」、これは「死んでから行く天国が近づいた」という意味ではありません。ユダヤ人は、「神」を畏れ敬い、「神」という言葉を使いませんでした。「神」の代わりに「天」という言葉を使いました。ですから、「天の御国が近づいた」とは、今日のテーマである「神の国が近づいた」ということです。さらに「国」というのは、「支配」とも訳される言葉です。ですから、それは、「神の国が、神の支配が近づいた、神が現実に力を及ぼされる時が近づいた、いやもう来ている」、そういう意味になります。(それで、『神の国』は既に来ている」と申し上げています)。イエスは「その現実があるから、その現実を豊かに、祝福に与りながら生きられるように『悔い改めなさい』」と言われるのです。

「悔い改めなさい」、これも2つの意味を持つ言葉です。1つは、私達が良く使う意味での「悔い改める」ということです。北九州でホームレスの人々の自立支援の活動を続けておられる先生の話です。先生は、ホームレスの人達がもう一度立ち直ることが出来るように、素晴らしい活動を展開しておられます。今までに1000人近い方々を自立に導いて来られました。でも、こんな話をされました。例えばアパートを求めている人が100人いたとして、しかし自分達の力だと5人分のアパートしか提供出来ない。この5人を誰にするのか。もしかしたら、5人の中に選ばれなかったために数日後には死んでしまう人がいるかも知れない。先生はそこで「自分達の活動は、人を助けようとする活動なのに、その一方で人を死に追いやってしまう活動でもあるのではないか」と悩むのです。そして結局、「自分達は罪人なのだ。罪人である自分達が罪を犯しながら続けて行くのがこの活動なのだ」と納得するところで逃れの道を見出すのです。善意の象徴のような活動の中で、人は自分の罪を見せられるとするなら、私達は、普段一体どれ程、神の前に罪を犯しながら一というか、神に喜ばれない生き方を繰り返していることだろうか、心探られる思いでした。しかし、それはある意味でどうしようもない現実だとも思います。ちょっと気をつければ何とかなる、というようなことではないでしょう。私達は、どうしても御心に適うように生きられない罪の現実があります。(私には、どうしても赦せないこと、赦せない人がいて、自分の弱さを思わせられます。その故に「神の国」の祝福をミスしていると思います)。だからこそ、神の前に「悔い改める」ということが必要なのです。

「悔い改める」とは、後悔することではありません。神の御心に敵う歩みが出来ない事実を認めて、「赦し」を求めて神を見上げることです。神に向き直ることです。「神の国」を生きるために、何度でも「悔い改める—(赦しを求めて神に向き直る)」ということ、大切なことだと思います。

しかし、「悔い改めなさい」には、もう1つの意味があります。当時ユダヤは、ローマ人に、異民族に支配されていたのです。ユダヤ人にとっては、屈辱であり、痛みでした。特に信仰的にそうでした。彼らは考えました。「もし世界を造った神がいるなら、そしてユダヤ人が神の特別な民なら、異教徒がユダヤ人を支配することが神の御旨であるはずがない。聖書の中で、神はいつかユダヤ人を救い出し、全てを正しくするという約束をしているではないか」。ユダヤ人にとって、その神こそが唯一の王、ユダヤ人に力と正義と平和をもたらす王でした。彼らは、その「王の国」が世にもたらされることを祈り、そのために働き、そのためには命さえ捨てようと思いました。具体的には暴力による革命です。当時のユダヤ人にとって—(全ての人々がそうだったわけではないでしょうが…)—

「天の国(神の国)」という言葉は、そのままローマを倒す革命と結びついていた、暴力革命によって勝ち取るべきものだったようです。

そのような状況の中でイエスが「悔い改めなさい」と言われた時、その言葉は「向きを変えなさい」という意味を持ったのです。「暴力革命によって、破滅のがけっぷちに行くのは止めなさい。あなた方は、神の民として、神の赦しと、神の平和に向かって歩むべきなのだ。あなた方は、神の光と、神の赦しと、神の平和を世にもたらすために招かれているのだ。その方向に生きる向きを変えなければならないのだ。あなた方が神に向かって生きるなら、神の支配の現実を経験するのだ」。イエス様は、そのように人々に「生き方を変えるように」叫ばれたのです。それが「悔い改めなさい」のもう1つの意味でした。しかし結果として、多くのユダヤ人は生き方を変えない、その延長線上でユダヤ人の国は滅亡を迎えるのです。

「神の国を生きるために悔い改める」、それは、赦しを求めて悔い改めを捧げ、赦しを頂きながら生きることでもあります。同時に「生き方を変えること」なのです。私達にとっても、それは『神の支配』の現実に関心して、神の御言葉に関心して、御言葉に添うように生きようとする事、「御言葉を基準にして生きようとする事」、それが求められていることではないでしょうか。私達の信仰生活の祝福のために—(「神の国」の現実を豊かに経験するために)—そのような歩みを重ねて行くことが大切なのではないのでしょうか。

私自身も、どれだけ神の御言葉に関心して生きているか、心探られます。三浦綾子さんがこんなことを言っています。「わたしはよく、人様に、『お祈りしてください』とお願ひする…わたしは、しかし、決して気軽にお願ひしているつもりはない。この言葉を口から出す時、わたしの心の中には、キュッと引きしまった厳粛な気持ちがある。本気で言っているのだ。祈りを聞いて下さる神がいられる。だから祈りはきかれる。ゆえに、人々に祈って頂きたい…イエス様は『もし、あなたがたのうちのふたりがどんな願ひごとについても地上で心を合わせるなら、天にいますわたしの父はそれをおこなって下さるであろう』とマタイ伝18の9で約束してくださっている。わたしの様な者でも約束は守ることが多い。ましてイエス様の約束である。きっと、心を合わせて祈るなら、きいてくださるにちがいない」(三浦綾子)。この言葉が心を打つのは、三浦綾子さんが「イエス様の約束を本気で信じている」ということです。御言葉に関心して生きていることです。

先日も紹介しましたが、あるクリスチャンが、様々な困難に遭い、「もう自分の人生も限界なのではないか」と思ったのです。でもそんな時、祈りの中で「目の前の事態がどうこういう以前に、自分は御言葉によって本当に養われて行かなければならない。そうでなければ本当の意味でクリスチャンとして生きて行けないのだ。これからは神の御言葉の約束にしがみついて生きて行こう」という思いに導かれて立ち上がった、そして神の恵みを経験したという話があります。私達も御言葉を求め、身近なことから御言葉に関心して生きる、御言葉によって生き方を吟味する、そのような歩みに挑戦して行くことが「神の国を豊かに生きる」ことではないのでしょうか。